

メディア多元化の時代における テキスト分析と批評理論の深化

桑 島 由美子

要 旨

互文性（間テキスト性）は、重要な批評概念であり、1960年代には、ポストモダン、ポスト構造主義批評における、メルクマールとなる学術概念になっていた。間テキスト性とは、通常二つ以上、複数のテキスト間に発生するインターテクスチュアルな関係を指す。歴史主義や、新批評への対抗として、間テキスト性は、それらと同様に、自由を価値趣向とする批評実践となった。間テキスト性をめぐる解釈と議論は、多くはフランスの思想資源、ロラン・バルト、ジュリア・クリステヴァ、ジャック・デリダ等に由来している。

互文性（文本間性）是一个重要的批评概念、出现于20世纪60年代、随即成为后现代、后结构主义批评的标识性术语。互文性通常用来指两个或两个以上文本间发生的互文关系。作为对历史主义和新批评的一次反驳、互文性与前者一样、也是一种价值取向自由的批评实践。围绕它的阐释与讨论意见、大多出自法国思想者、主要有罗兰·巴特、朱丽娅·克里斯蒂娃、雅克·德里达等。

キーワード：新批評, 間テキスト性, 超文本, テキストの開放性, メディア
論的転換

序 市場経済下の文化状況と理論研究

近代文学における文化批評と、メディア論的研究の自著三部作の第二部『九十年代文化批評』を2017年に上梓した¹⁾。ここでのメディアとは、表象文化論やジェンダー、審美モダニティという近30年来の文学史における問題意識を背景としている。第三部は、二十一世紀が舞台となり、インターネットなど伝播メディアの多元化も今後の課題となるが、その根底にある「主題としての近現代文学」及び、テキスト分析理論の深化に焦点を当て、最新の批評理論動向を中心に詳述すると共に、新批評による小説研究の具体的成果の事例を提示したい。

80後作家に続く、ネット文学の勃興は、改革開放、新时期文学以降主流となった女性作家やジェンダーの潮流、また解禁当初からメディアミクス現象を惹起した通俗小説の延続にあり、多くの新世代作家を世に送り出した。

国家の新人育成プロジェクトでもあった、所謂新概念作文コンクールによって文壇に現れた新世代作家による多くの青春文学の文芸誌が出版市場に現れた。アメリカの『タイム』誌への掲載を一つの契機として、「青春小説」の作家達はスターダムに乗るが、アイドル系ばかりでなく、文化の消費市場を背景に多くの「実力派」も生み出している。それは文学作品の美学的特質（言語・構造・叙事スタイルなど）によって決定されるが、郭敬明の「小時代」などのシリーズも都市文化のラビリンス（迷宮）を表現し得ており、新世代の、価値観、感情を創造し、使用価値、交換価値の商品のフェティシズムを通して、それらを巧みに汲み上げている。

若手作家とメディアの相互依存関係は、後に多くの出版プランナーと巨大メディア産業を創出する。創造的才能と、数値化、文学の特殊な要求を背景に、増殖を続けていったのである。こうして伝統的な文学史に於て断絶的な創作が新しい流派の誕生を引き起こし、独特な言語スタイルを通じて新たな時代の輪郭を描き出すことになった。

日本においても1970年代以降には純文学の一部も、所謂メディアミクス小説として存在したが、2005年以降、インターネットの普及によって誕生した中国ネット文学は、その産業化の規模や、独特な感情表現、言語表現とコミュニティの問題など、中国独特な文化現象としての景観を呈している。ネット文学には文化多元主義時代に相応しい形式とイデオロギーの表現、開放性という特徴があるが、それもやはり「有限」であり、批判的見解の多くは伝統的作家から寄せられている。

新时期を代表する張抗抗は「ネット文学は文学の媒体と伝達方法、読者の読書習慣、作者の視野、意識、思考方法、表現方法を変えるだろう。しかし一体どの程度、文学それ自身、例えば感情、想像、良知、言語などの文学の要素を変えることが出来るのだろうか。」と述

べている²⁾。批評家の戴錦華は、「ネット文学は消費文学の經典の様であり、……通俗文化のモデルとなるものである。そこでネット文学は、ある種パラドックスに直面することになる。インターネットが即時的に消費されるとき、最も古い芸術である文学は、最初から永久不変を志向しているのだ。」と述べている³⁾。

現代文学研究や現代文化批評においては、代表的な論者、張頤武、李欧凡等の文化批評があり、中国現代文化におけるメディア多元化の発展趨勢について、いずれも肯定的な評価である⁴⁾。さらに新世代の文学研究者の中には、研究対象として欧米の批評理論を駆使した著作が、2010年代以降、非常に多く見受けられる。

文学領域では、歴史、理論研究のほか、穿越小说を中心に、神話学やテキスト分析の理論が広範に用いられるようになった。例えば、北海道大学の学位論文「中国ネット小説の物語論的構造及びそれを生み出したネットコミュニティのあり方」(2015年)においては、プロップ・グレマスの構造分析が試みられている。穿越小说は、ネット文学の重要な領域で、科学幻想小説の幻想性を参考にしながら、武俠、歴史、言情小説を枠組みとし、主人公がもう一つの空間で数奇な運命を辿る人生をテキストとして叙述する。

構造分析の項目としては、穿越小说の代表作を機能別の項目に分けて分析しており、分離、事故、再生、適応、模倣、一度目の難題、難題の解決、補助者の解決、補助者の獲得、一度目の被害、探り出し、二度目の被害、恋の成就、勝利、日常への思い……等、物語構造の類型パターンを提示している。

北京大学教授の邵燕君による近著『ネット文学の經典解説』では、20年来のネット文学史の発展と、經典作品の類型化により、系統的作家、作品論を試み、ヘンリー・ジェンキンスの、介入的分析、ファン心理学を援用しつつ、市場経済下における文化現象の考現学から、学院派(学者、エリート層)による学術研究への橋渡しを企図している。

最近では、台湾、中国における現代華流メディア文化の発展は、日本の社会文化学者からも注目され、欲望の解放や、複雑な現代社会の陰影を内包しながら、幅広い共感を以て未だ発展の趨勢にある。現代文化批評家や、伝統的作家からの多くの批判が寄せられる中で、若手研究者を中心に2015年頃からは、20年に渡るその概要を背景として、文化社会学的な、またテキスト分析理論を用いた学術研究の成果が見られるようになった。

批評理論としての互文性(間テキスト性)

批評理論として、とりわけ注目されるのは、ロラン・バルト、またはクリステヴァの「互文性」という概念であり、また流動するテキスト、ネットユーザーを「ノマド」(脱領域化された存在)として捉える等、フランス現代思想の理論資源に加えて、最新のアメリカにお

ける大衆文化理論、ファン心理等、流行文化の分析も併せ文学、文化研究の理論化傾倒も深化している。ポスト産業資本主義の文化的局面がポストモダンだとすると、その代表的なメディアであるインターネットが主流文化の方向性を大きく変えたと言える。いわば、インターネット文化はドゥルーズが「千のプラトー」で推奨したノマディズムを彷彿とさせる自由自在で無限に開放された公共空間なのである。

現在ネット小説分析に広範に取り込まれている「間テキスト性」(互文性)とは、先駆的な理論家、批評家達によって、様々に定義されてきた。クリステヴァにとっては、文学言語の対話的性質を参照する用語である。クリステヴァはバフチンの肯定的=変形的アプローチの代表者で、バフチンの対話性という考えをより個人的なニュアンスの少ない間テキスト性という概念に仕立て直し、問主問性に対峙させた。文学テキストはもはや自律的な本質体とは見なされず、すでに存在する無数のコードやディスクール、先行テキストの産物とされる。そのため意味をテキスト内部に押し込められているものとは見ず、テキストの内部と外部についての常識的な概念に疑義をはさむのである。

反転不可能と反転可能というテキストの要素を対照させたことにより、バルトは読み得るテキストと書き得るテキストに関する理論を構築出来るようになる。この対立をそのまま単純に歴史的に見る傾向がバルトの著作には散見される。バルトの理論はテキストを書くものが最終的な語る主体(著者)ではなくて、文化テキストを構成する一般コードとは慣習と間テキスト的なディスクールであるとの可能性を切り開く。しかし文化テキストは、問題となるテキストに優先して存在し、著者を思考し、書く主体としても創造する⁵⁾。

このほか互文性の概念として多く参照されるのが、ブルーム、デリダ、レヴィ・ストロース、ドゥルーズであり、神話学とテキスト分析が理論の主流を占めるようになった。中国では文化研究の理論資源は主に民族学に依拠しているが、それが間接的に文学研究に浸透を始めている。

「互文性」を中軸に据え、これをポストモダニズムと同義に捉えて、メディアとしての同時代文学を分析した著作に陸定家『文之舞—ネット文学と互文性研究—』がある。著者は中国社会科学院文学研究所研究生院教授で、2014年に社会科学文献出版社から刊行されている。第一章では、超文本(ハイパーテキスト)と間テキスト性を軸に、テキストの本質と発展過程を捉え、第二章では、批評理論の淵源をバフチンに遡り、前衛的理論への批判も看取されるが、テキストの開放性について言及している。第三章では間テキスト性のコンテキストからの文学経典問題について、複製時代の芸術論、作品のアウラ等についてベンヤミンから引用している。第四章では、身体創作と間テキスト性による解釈について、ジェンダー的視点を踏まえて論じている。第五章では、ポストモダンの症候としての「互文転化」と先端メディアのコンテキストにおける文学の存在方式について論じている⁶⁾。

理論研究としては、清華大学教授の陳永国による『理論的逃避』（北京大学出版社、2008年）では、1960年代の、主にフランスにおける独創的な思想開拓から今日までの足跡を、精緻に分析し、一種の美学政治の風格を具えている⁷⁾。

文学批評とテキスト分析—新批評理論による研究成果—

二十世紀の経典作家についても、テキスト分析の成果が無いわけではない。

批評方法としてのニュー・クリティシズムは、脱構築がその命題の幾つかを引き継ぐことになり、衰退していった。思想的潮流としての新批評は、文献学と文学史というヨーロッパの伝統から、新しい修辞学と詩学を優先することによって、文学研究の領域を刷新する役割を担ったとされる。夏志清の著作は、モダニズム文学が西欧市場における有力商品であり、新批評がそれを推奨し、さらには学術界を席卷した。その著作はモダニズム審美主義によって、西欧における中国現代文学研究を合法化するものであった。筆者には、作家茅盾を新批評によって、読み解くアメリカの研究論著の翻訳がある。この論文は、茅盾の初期小説をその立場（イデオロギー）とその文体論的視点から論じた学術論文であり、研究領域における新批評紹介の瑞緒となった。

茅盾の中心的思想、道徳的見解、偏見、文化規範、現実の概念化のモード、政治的傾向、教訓的目的、これら全てを総括して、茅盾の初期小説のイデオロギーとして論じている。序に於いて、その方法論的模索について触れているが、著者は、ほかの政治教訓的な、あるいは社会心理的な著作に取られた方法を、茅盾に適用させようとして挫折を繰り返して来た。その結果、様々な批評理論の折衷に行き着くが、その基本を新批評（ニュー・クリティシズム）に負っているように思われる。作品を作品以外の情報から遮断し、全体の有機的統一にこだわらずに、不確定な要素を積極的に取り込み、テーマとシンボルの探索を図っている。

序において、ウェイン・C・ブースの言う「含意の著者（Implied author）」について度々言及しているが、論述の中でも審美的観点から、茅盾の傍観的技法、距離を置いたアイロニーの美的効果を積極的に論じている。ブースは『虚構のレトリック』の中で、テキストと現実の作者との実態のよくわからない関係を問題にするよりも、その作者が創造したテキストが生み出すレトリカルな効果から、逆に「作者」を規定する方が、もっと深い意味があると述べているが、作品から作者を照射する視点は、この論文に一貫している。

この論文は、茅盾研究が、歴史社会的な意義から高く評価される1930年代の中長編小説ばかりに集中して来たことを反省し、1932年に発表され、中国現代文学史の画期とされる長編小説『子夜』以前の短編小説群のみを研究対象として選び出している。その中には散文詩に近い作品もあり、いずれも試作的性格が濃く、主観抒情的で、欧米文学の影響も、直接

的、多面的である。著者によれば、客観的批評を意図しながら、印象批評に陥ったとのことであるが、これ以外にマルクス主義批評の要素も混在しているように見受けられる。

中心的矛盾と言うテーマは、言葉、イメージ、象徴などが、このテーマをどのように取り巻いているかを問題としている。著者によれば、初期小説におけるプロットや主題的関心は、事実上、二、三の中心的主題（テーマ）のバリエーションである。そこで、バーニングハウゼンは、この「中心的矛盾」を矛盾の回帰的テーマとしている。夏志清が、プルセークの批判に対して「矛盾が初期小説においてとりわけ得意としたのは、イデオロギー的なものと、性愛的なものとの関係の二元性である。」と述べている様に、個人の心理的性格によって、両極端の個性が弁証法的に分割されて示されると共に、性愛の関係の上に政治的シンボリズムが重ね合わせられている。この様な二元的設定について考察が加えられる。

「中心的矛盾」と同じく、もう一つの回帰的テーマとして「存在の意味」が不可欠であり、その他のイデオロギーを割り出す布石でもある。中国、日本では、矛盾の小説を批判的アプローチに由来したものとして扱っているのが、マルキシズムの関心、観念、カテゴリーに言及するだけで、そのイデオロギーと立場が狭く限定される。しかし、小説に取り上げられる革命や政治の問題は、必ずしも完成した作品の主要な関心としては現れない。

著者の無意識の次元においては、小説のテーマは、人間存在の意味、人生の価値の探求であり、思想的混乱の中で、最終的には伝統的、革新的を問わず、全ての既成の人生哲学を拒否していくのが、初期小説の人物像である。矛盾自身、五四におけるニーチェへの傾倒など、実存主義に触発されるところも大きく、経済危機、疎外、社会的地位の縮小などに直面した中産階級の知識青年達が、人間存在の意味という解きたい問題と取り組み、実存主義の享楽、もしくは未来主義に向かう過程が描かれる。

また矛盾の小説に見る現代社会の諸相に対する告発は、モダニストの主観論とは異なり、マルクス主義的な急進主義と、人道主義とに端を発していることが、まず確認されている。結局、これらの特質は、現代的な疎外の文体的強調と思われ、モダニズムでは「中心的意識」（登場人物や主人公の遠近法を通じてプロットが表現される。）における思考や信条の断片を織り込んだ性格描写の技法が多く用いられるが、それはモダニスト作家達が現代人の「内なる現実」を強調する方法に近いものである。上海のモダナイズと同時に、都市近郊の農村の崩壊、著しい衰退と、伝統的な秩序の上に立つ小農経済のシンボリズムへのこだわりを『農村三部作』で見せている。

矛盾初期小説の若い主人公たちが抱える倦怠、彼らを取り巻く現実と、分裂した自意識、疎外、（多くは意識の流れ、的なナレーションを伴う）非個人的な「第三者の客観性」幻覚、「倒錯した意識」の兆候としての知覚的、概念的な歪み、夢、不安な超現実的なイメージ、アンモラルな官能主義、現代技術による人間崩壊の告発、「夢」が効果的に使われている点

などが上げられる。イロニーと風刺とが存在する美的距離の維持を促進する。距離とは、ここでは読者とプロットの事件との直接的な緊密性である。素描について言えば、「カメラ・アイ」の技法、三人称の意識など、語りの角度から初期小説の変化を見ると、語りの角度に多様性、(内在的現実性、外在的現実性)が無くなり、非個人的な語りが、人物の内面現実性を外部から示すようになる。また擬人化が用いられる場合、それは崩壊した意識や疎外と結びついて、矛盾のメタファーの典型であり、かなり芸術的効果を狙う場合が多い。

結 語

改革開放以来、中国の学術界では、文化人類学、社会学など新興の学術領域を端緒として、批評理論は、文学、歴史学、哲学など伝統的な人文領域をも席卷するようになった。それは同時期の日本の学術界には見られない特異な現象であったと言える。(例えば歴史学における彭剛著『叙事の転向—当代西方史学理論的考察—』(北京大学出版社、2009年))

消費文化、大衆文化が社会文化学分野で研究されてきた日本と異なり、中国では文化人類学や神話学、文学研究におけるテキスト分析理論、とりわけ互文性、超文性と言う概念がメディア多元化への転換と、現代文学の発展趨勢について、主要な概念になっている。二十世紀文学における経典研究においても、既に国内外(北米、台湾、日本等)における研究成果には、新批評以来の批評理論による分析が定着しており、初期の文学研究における批評理論の精華としては、上述の『中国近代リアリズム文学の黎明』(茅盾初期小説の研究)が挙げられる。

中国文学研究和新批評

資 料

茅盾という名の矛盾に関する分析

茅盾というペンネームは、もともと「矛盾」であったものを葉聖陶の助言を受け入れ、草冠を付け加えてできたことは、よく知られたことであろう。初期の茅盾が、矛盾という言葉にある種のこだわりを持っていたことを窺わせるエピソードだが、本書はいわば彼の「矛盾」の様相を、初期の小説群を通して正面から叙述したものである。テキストの「矛盾」は、ここでは必ずしも快刀乱麻と解きほぐされる訳ではない。むしろ、読むことの物語にむりやりハッピーエンドをつけず、読みの可能性と留保を指摘するにとどめている。むしろその結果、一人の作家が強いイデオロギー的な要請のもとで、自己の体験と技法にどれだけ忠実であり得たのかを測定し、浮かび上がらせることになった。その意味で本書は、なまなか

ならない一冊だと言えよう。

最初の章では、茅盾の初期小説における「中心的矛盾」が取り上げられている。その矛盾とは、「恋愛と心理的リアリズム」これと「政治と革命」との二分法において現れる。矛盾は、恋愛か、革命か、という二律背反としても起こるが、恋愛それ自体、革命それ自体においても、熱情と失望の間の動揺という形で現れる。作品では、国家や革命への献身という大きな志と、自立や自由、自己実現という個人的追及との二つのテーマの中で、若い知識人が重層的な矛盾に襲われ、苦悩する物語が典型的である。プロットの構成としては「お互いに対照的である二人の異なった人物を設定し、各々に一つの闘争や矛盾の半分を代表させるか、一人の人物像の中に矛盾を体現化させる」。作家自身は、革命に対して「葛藤」の気持ちを抱いていたし、恋愛や結婚の自由についても、同様に「アンビバレント」な感情を持っていたと、原著者は推測している。

こうした「中心的矛盾」の二側面が有機的に結びつくこともあった。そうした例として、最初の短編小説『創造』が第二章で、分析されている。『創造』は、主人公が、教養はあるが中庸を心得、保守的な政治観を持った妻を理想として作りあげようとするのだが、妻は夫の予想を越えて自立してしまう話である。妻は性愛の面でも目覚めるとともに、夫には過激と思われる政治組織に関わろうとする。ここでは性愛と政治という二つのテーマが結びついて、進歩した妻と置いてきぼりを食った夫とを巧妙に描いている、という。この作品についてはさらに夫の形象に抽象的な解釈が加えられて、「国民党に従った保守反動分子」のシンボルとして把握されている。「中心的矛盾」に絡んで、登場人物にあえて政治的アレゴリーの要素を読み取ろうとする所も、原著書の特徴であろう。この方法によって、テキストの読みから作者茅盾の意識的、無意識的な思想傾向に迫る回路を探ろうとするわけである。

第三章では、リアリズムを基調としたこの作家の技法の中に、モダニズムの手法が採り入れられているとの指摘があって興味深い。ときたま作家は、「意識の流れ」や幻覚などの心的イメージを使ったり機械による擬人化の手法を使う。こうしたモダニズムの技法は、1930年代前後、中国の青年が抱いていた焦慮、倦怠感、疎外意識や不安な感情を描出するためであった。原著書は、このような文体上の変異が、茅盾の関心のありかに関係していると示唆したいようである。

本書のおもな関心は初期の小説にあるけれど、茅盾の小説の通時的な変化に言及しない訳ではない。1927年から1929年は、個人的心理的な側面に重点があったが、1930年前後、政治的シンボリズムがかなり散在する時期を経て、1932年以降の著しく社会経済的側面が強い立場に移行することが、第五章で明らかにされている。そこで第四章では、1931年に書かれた『三人行』に焦点があてられ、過渡期にある小説の主題と構成が分析される手はずである。

原著者はこの作品を政治的寓話と規定して、三人の登場人物がプロットに応じて政治的な役割を果たすことを紹介している。ここで解釈は重層的になる。たとえば、懐疑主義的な登場人物のひとりが、共産党員と思われる人物に敬意を表し、「自分を恥ずかしく感じた」とテキストの一場面に書かれている。この間接的でやや唐突な賛美は何を意味するのか。原著者はいくつかの解釈を提示する。作者自身の大革命期に犯した消極的な態度に関わるのか。国民党の検閲への配慮か。左翼のイデオロギー的な純粋性を回復しようとした試みか。原著者ははっきりした断定を下していないかのようなのである。しかしこうしてテキストの曖昧さや無理はこの小説の特徴で、寓意的な作品の技法上の要請と、共産党の批評におけるイデオロギー的な要請との「せめぎあい」のためであると指摘する。作品はこれ以前の小説群との類似性を多く残しており、物語の混乱は、イデオロギー的目的が完全には芸術性を支配していない証拠であるという。この辺はなかなか、読みごたえがあらう。

もっとも、「革命闘争に全面的に貢献できる人物と設定」されたはずの登場人物を、次のページで「ブルジョア観念論」を象徴している、と記述する原著書の「矛盾」は「せめぎあい」であるはずも無く、不注意と言わざるを得ないのだが。それはともかく。次の章では初期の小説の立場が概括される。革命と恋愛の「弁証法」を通して、政治的意図よりも個人の人生の欲求と価値を問おうとする「実存主義的享楽主義」が打ち出される。原著書は、初期の作品においては、共産党のイデオロギーとの間に一層の距離があったことを推定している。最初の章ではスタイルについて総括的に触れられ、擬人法や色を使ったシンボリズムなどが再認識されるが、基調は心理的リアリズムと呼ばれるものである。根本的にそれがイデオロギー的な解釈を圧倒している、と原著者は補足している。

少々難を言えば、叙述が遠まわしでややわかりづらく、誤解されやすいことと、矛盾の原文に対する理解に、納得できない箇所がいくつかあって、テキストの違いとは考えられないことである。またラップの『弁証法的唯物論の創作方法』について、どうも誤解をしていそうな記述も一カ所みられる。訳者も可能な範囲で訳注をつける努力をして欲しかったように思う。

とは言え、矛盾の本格的な小説論を日本語で共有できた意義は大きいことであらう。矛盾の文体については是永氏の、初期の短編については南雲氏の、それぞれ業績があるが、包括的な小説論は寡聞にして知らない。そもそも、矛盾ばかりでなく、日本の近現代中国文学研究では、作品の文芸批評、とりわけ小説論はほとんど顧みられていない、と言っても過言ではないだろう。作品が語られるのは、かつてはたいがい、歴史的背景を含めた作者の伝記との関連においてであった。最近では、作品を構成する材料の考証学的研究、とくに比較文学的な実証がよく見られる。それらは丹念に精緻であって、もとより作品の理解に奥行きを与えるが、大胆なオリジナリティと結びつくことが珍しい。研究の軸として、読解の面白さが織

り込まれるのが難しいのである。そういう状態に置かれてみれば、本書は一種の刺激剤としての価値を十分に持っているだろう。

原著者はこの論文でスタンフォード大学の博士号を取得している。既に述べたような粗雑さは散見されるが、アメリカの文学研究における「新批評」の伝統と夏志清に始まる近現代中国文学研究の長所とを継承する力量のある研究者であることは疑えない。したがって、わが国との研究風土の違いも含めて、本書は一読に値するものと思われる。なお訳者に本書を丁寧に解説した論稿があるので、合わせ参照して頂ければ、本書のより詳細な位置づけが得られるであろう⁸⁾。

註

- 1) 桑島由美子著『九十年代文化批評―「文化転換」をめぐる新思潮と審美モダンティー』汲古書院 2017年
- 2) 張抗抗「網絡文学雑感」『中華読書報』2003年3月1日
- 3) 戴錦華「網絡文学？」『莽原』2000年第三期
- 4) 張頤武「網絡文学并没有偏離主流的價值觀」北京晨報 2016年6月17日
- 5) グレアム・アレン著・原宏之訳『ロラン・バルト』青土社 2006年
- 6) 陸定家著『文之舞―網絡文学与互文性研究―』社会科学文献出版社 2014年
- 7) 陳永国著『理論的逃避』北京大学出版社 2006年
- 8) 代田智明（東京大学）による書評「茅盾という名の矛盾についての考察」より抜粋